

応募規定

- ・応募作品は返却いたしませんのでご了承ください。
- ・選考作品の一切の著作権（著作権法第27条、第28条に規定された権利を含む）および映像化権はあかがねミュージアム運営グループに帰属します。
- ・選考に関するお問い合わせは受け付けません。
- ・応募作品が他作品の全部または一部を模倣し、第三者の権利を侵害している場合に発生した問題や損害の解決はすべて応募者の責任となります。
- ・同一、あるいは極めて類似性の高い作品を別の賞に応募すること（二重投稿）はご遠慮ください。
- ・応募にあたってお預かりする個人情報は、厳重に管理いたします。

監修・選考

映画監督 西山将貴

愛媛県松山市出身の弱冠23歳の映画監督。14歳の頃から自主的に映像制作を始める。高校進学後はSF映画「The Flap of the Butterfly's Wings」を制作し、4カ国10の映画祭に選出された。高校卒業後、イギリスに渡り「The Eternal Moment」を制作した。

2021年には監督作「スマホラー！」がアジア最大級の国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア2021」で新設されたバーティカルシアター部門の最優秀賞を受賞。同作は第25回ロサンゼルス国際短編映画祭にもノミネート。2021年えひめ文化・スポーツ賞を受賞。2022年には、MBS開局70周年ドラマ「インバージョン」を監督し、22歳で地上波ドラマ監督デビューを果たした。

●代表作

MBS開局70周年ドラマ インバージョン(監督/脚本)
スマホラー！/Smahorror(監督/脚本/編集)



企画制作 ・選考

あかがねミュージアムプロジェクトマネージャー 山本清文

2021年に田丸雅智さんによるショートショートワークショップを実施、20本が収録された冊子を作成し、2022年に演劇化しました。今度は映像化。冊子の物語を脚本化するもよし。オリジナルでもよし。新居浜で新しい物語を作り、映像化しませんか。



応募先

メールもしくはあかがねミュージアムへご持参、郵送ください。
Googleフォームからもお申込みいただけます。

●メール event@akaganemuseum.jp

●郵送 〒792-0812 愛媛県新居浜市坂井町2丁目8-1
あかがねミュージアム 脚本募集係



E-Mail



Googleフォーム

お問い合わせ

あかがねミュージアム 0897-31-0305
担当：山本 yamamoto@akaganemuseum.jp



新居浜ショートショートムービープロジェクト みじかい映画脚本募集

応募期間

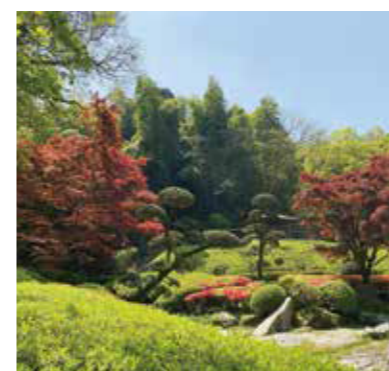
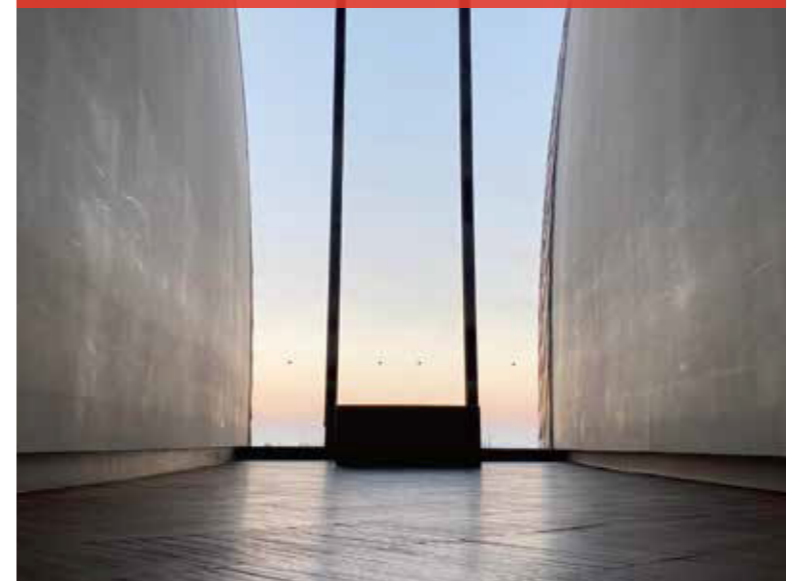
2023.4/29 → 8/31

新居浜を舞台にした短い映画を作ませんか？

その脚本・あらすじを募集します。年齢・経験は問いません。
選ばれた脚本は2024年度に撮影し上映会を行います。作品は1～2分以内の短い物語。

監修・選考にご協力いただくのは愛媛県出身の映画監督・西山将貴さん。あなたも脚本家・映画監督デビューしませんか？

脚本はしっかりとしたものでもなくても大丈夫です。選考後に、西山監督にアドバイスをいただきながら、撮影・上映まで実現させましょう！



NEW LIVING BEACH



お名前	脚本家名 <small>(なければ、本名でも可)</small>
住所	電話番号
ロケ場所 <small>(新居浜市内)</small>	
タイトル	

例文あらすじ

<p>題「巡り」</p> <p>男は美術館巡りが趣味。全国美術館を一人旅している。今日は新居浜市にある「あかがねミュージアム」に来た。室内に展示されている太鼓台を見上げて、スマホで写真や動画を撮っている。「これ、実際のお祭りの時どんな感じなんだろう？」夢中になっていると、大勢の法被を着た男たちが入ってくる。男は突然のことに驚く。「え!？」</p> <p>彼らは、太鼓台を担ぎあげ外に運び出す。男はその様子をスマホで撮影しようとする。録画ボタンを押す直前、男は法被を着た一人の中年男に声をかけられる。「いたいた！探してたんだよ。体験申し込みの人だろ。早く法被を着て、太鼓台をかいてくれ」なんだかわからないが、男は突然法被を着せられ、男たちと一緒にかき棒を担いでいる。声をかけてきた男と一緒にかき棒を持ち、太鼓台は新居浜の街を回る。たくさんの見物人。お年寄り、大人、子供、赤ちゃん連れ。。。たくさんの笑顔に男は出会う。あかがねの前の広場に戻ってくると、向こうからもう一台太鼓台が来た。二つを並べて運行する。「チョーサージャ」「ソーリャ、ソーリャ」「ソーリャ、エイヤーエイヤー、ヨイヤサーノサーサー」威勢良い掛け声で一齐にかき棒を力一杯持ち上げる。「もっと力を込めろ!」「息を合わせて!」男たちの声がする。太鼓台が、天空に向かって高く担ぎ上げられる。男たちがかき棒を揺さぶると、太鼓台の大きな扉が美しくなびく。見物人から大きな拍手が巻き起こる。</p> <p>棒を離れた男たちは汗だけで、息も上がっている。男も思わずその場に座り込んだ。風が心地よい。「太鼓台の重さを知ってるか？」男は突然後ろから見知らぬ誰かに話しかけられて、返答に困っている。「3トンだ。そんな人の力で持ち上げられると思うか？太鼓台をかくには、チームプレイが大事。みんなの息を合わせないと、こんなことはできないんだ」かき夫の誰もが、その健闘を称えあって握手をしたり、肩を叩き合ったりしていた。「今日はあかがねの太鼓台の入れ替えの日なんだよ」法被を貸してくれた男が現れた。男たちは、さっさと新しい太鼓台をあかがねミュージアムの中に運び込み、設置する。男は、法被の男と一緒にまた展示室に戻り、その様子を見ていた。設置が終わると、男たちは展示室を出て行った。「あ、これ！ありがとうございます」男は法被を脱いで、手渡した。「どうだった？太鼓台かいてみて」「初めてのすごい体験でした。ここじゃなきゃ、味わえない」「みんなが一つになれる。それがこのお祭りのいいところさ。一回体験したらすっかりハマるよ。また、ぜひ秋にも来て参加してよ。そっちが本番だから」片手を上げて法被の男は去っていく。男は手に持っていたスマホをしまう。「せっかくの機会なのに動画撮るの忘れてたなあ。また秋に来るか…。」男は太鼓台を見上げながら、つぶやいた。(1036 語)</p>	あらすじ
---	------